

人の一生は重き荷を負ふて遠き道を行くが如し急ぐ可らず

行「おい、氣でも狂つたのか、さうこづきなんなん、又夫婦喧嘩でもしたので、手前は幾歳になる。女「何でも宜いから一所に妾、家へ來て呉れ（くよくよ）、何も夫々に胸倉を取らなつても宜い、逃げやアしねぬか……女「それのやうな人は、逃げるかも知れない。行「其機嫌も男に似てする氣遣いはねぬ。女「アア何でも宜いから早く

では、た前の鍛った鍔がいくら名剣でも、さう云ふ内輪に疵があつては、日本人は義に強い性質ゆゑ、コナリ、相州の行光だと云へば、位の高い公家武士が腰にも佩いて下さるし、土曜へも秘めて置くがむが、况今此仕儀で此の五郎が井戸川へ遣入つて、幾つか死方として見な、義に走るが日本人の常行光は刀は切れるが品行が悪いと云ふ評

電話開通千四百九番
明治町一丁目
為里德

李光用無國敵會堂前、於刺客李花
の爲めは疑はれ、二箇所の創傷と被
る過甚な憂へものありと傳へらる
に遇して抱惑なる朝鮮人に刺され
死者にして抱惑なる朝鮮人に刺され
死者と雖も、世に在まはるに於て五
び、試う八面希瑞として珠の如く、
の陰翳なき、伊藤公すらも、認ら
るゝに、兇彈に中りて棄てせられ
るゝに、然るにこれに反して、秘密
機との化身たる李光用の靈が、刺客
發見所となりしは當然にして予は成
其の過かりしを咎まんと欲す。

明に依りて解決せられざる可らず。予、
雖なりと雖も日本人なり、彼れ賢なり
と雖も到底韓人なり、此れの心を以て
彼れを付度す、或は中らざる節を以て
保せず、然れども此の刺客は一進、大
勢何れにも屬せざるものなるを知るに
難からず、此れ彼れ等の迷惑を察する
所以也。
萬一其の刺客の系統にして彼の兩派の
何れかに屬せざとせんか、予は其の不
明を愧づれば足る。敢て天下の問題に
非ざればなり。(廿三日稿)

▲免稅貨、施後、北韓、（北韓） 本年五月二十六日、（北韓） 日に於て法律第十九號を以て濟津港より間島及び渾春方面に通過する貨物に對しては免稅通過せしむるを得ると發布さるゝや議論交々湧出して容易に實施の運に到らず北韓民をして漸く疑惑

何首にても隨意^{なんじ}に用紙^{ようし}用箋^{ようせん}類も又御
隨意^{なんじ}の事、締切^{せきぎり}期限^{きげん}十二月廿五日、
發表^{はつぱ}は四十二年一月元旦の本紙上を
以てす、同好^{どうこう}の士奮て投函^{とうわん}せられん
ことを希ふ

十一月廿日

境に於ける重要な地に監視署を設置し、
 始め清津税關に輸入税を支拂ひ而して
 國境に於ける監視署で證明を得然ら
 ば清津に於て義きに拂込みたる輸送
 の拂戻を受くる事となり居れり然るに
 國境に於ける監視署は最初に六ヶ所の

律第十九にて發布されたる當時に於て
濫手に業の暴利を得んと豆門江沿岸間
嶋に四五人入込み時機の來るを待ち居
るものゝ如し未だ實働のさるに於て
すらすの如し況んや實働後に於ては不
正商人の入込むために本邦商人をして
不信用に陥らしむるに於ては國境貿易

即ち北韓の國境は僅かに豆們江を隔て
閩島及渾春に通ず。加ふるに冬季間は結
氷して荷馬車或は牛車の通行を自由と
しむる。尙國境に面せる地は山岳の多い
如きは殆んどなきが故に一定の道路を
交通せずとも何處の地帯を問はず牛車
完用

良民をして安心裡に渡り合せしめん方は
執るは目下の急務なるべし(社友報)

俳句

△歳末五句 千句 春

短冊の題も出来て春隣
掛ひに知らしめるや移轉先
暖品宛めて春を待たれけり

商人は遂に資本までも倒産せしむるに至るやも慮るべからず例之清津より申島に通過したる貨物が再び會事まで戻り來る時は一行幸に就いて無税なすかに於てはかくの如く重徴なる運賃を

此時國光^{このときくにみつ}は食べかけた箸^{はし}と茶碗^{ちawan}をが
り放出^{はなつ}して、飄緲^{ひょうてう}として居たが、や

第六席 邑井一講演
國光^{くわく}は食^くべか^かけた箸^しと茶碗^{ちわん}をが^が出して、魔組^{まぐみ}をして居^ゐたが、や



の下手だ、と、銀や銅を鍛つて居るが
腹の中は、何ん、前例の様に腐つて居る
へ、不願の願たる刀鍛冶の徳として
自分は死んで身体無く共、観へた刀は
千萬歳の末までも、砥敵さへ退れりやあ
幾つて居るのが、俺等の徳だ、行、國光よ
此の行光は立派を失なつた、穴が有なら
這入て、五郎をれ秋が惜ひのは氣
が注なれじやあ、無いけれど、毒害迄
とは知らなかつた、知つての通り、森川
が金を捨て與たればこそ、俺の出世、
今更、隠子を惜ひ、くらと、離縁をすれば出
來もするが、夫じやあ、餘り、浮薄のやう
だ、老先、知れた森川馬之丞が亡人にや
た以上は、古い尊鞋を脱も同様に、最う
三年の其間、五郎を此家、に預けて置か
う、世の中で、義理と云ふ二字程、つらい
ことはない

廣 告

明治四十三年一月一日正午、京城ホテル
に於て新年祝賀の爲め、名刺交換會開催
候に、付御成金の諸君は、會費五十錢相
添へ、御申出相成度此段、廣告
發起人、イ、ハ、英、願

石塚	今井	忠雄
市原	藤堂	池田
戸葉	盛雄	三郎
和崎	遠光	大岡
國岡	常市	若林
俵	竹山	加藤
		勝一
		資藏
		純平

「ふは、人非人だ、彼の女、五郎俺に懸
つて居られねぬ、親父を引張って来い」
又「五郎さん、妾が引張って来る。行」早
う連れて来い。五郎「連れ来なくつて何
をするものか……」
文を連れねらすつては私が迷惑を致し
ます。女「ナニ、心配しないでよい、
私に迷惑は掛けないから……」
れみ「片足に下駄を穿いてガラ／＼スタ
と家を出た、折しも好し行光は用
事があつて外出した歸り途中でビタ
リと出遇つた、れみつは「ア、また、お
前さん、あゝ兄さん……」
「是れ何
だ、何で俺の胸倉を取らんだ。ア
痛む」女「コレ、兄さん……」

れは驚いた、夫婦して俺に食つて掛
つて、何うしたのだ正月たア何だ
れ目度と云ふことよ、汝は餘程た
へ度や、オイ兄！俺の腹の中はひつ
り返るやうだ、ヤイ、確乎しく、ヤ
行！れた前の方が確乎しくくらア住
ねわ、氣でも狂つたか、オヤ五郎何
に來たのだ。國氣なんざア狂はねわ
外かちやあねが、今五郎が來て叔
さん御相談と云ふから。何だと云ふ
斯う々々云ふわけ、れ前も今相模の
匠とまで言はれ、日本でも指折りの
上へ敷かれてある身でありながら、
女房さんが鬼のやうで邪見な爲めに
愛想に考ける五郎をまで殺さうとし
居る、家内にさう云ふ不吉があるや

中西喜久男
高橋 榮三
鶴尾 謹親
藥師川 常義
松井 茂
石城 菅三
足達 龜治
佐藤 兼殿
三浦彌五郎
菅原大太郎

中村 再造
宇佐川 一正
倉富勇三郎
山口太兵衛
小宮三保松
荒井賢太郎
淺野 長七
木内重四郎
峯岸繁太郎
菅谷駒之助

質ながれ衣類
大安直澤山あり
曙町(元大韓日報筋向)
大槻商店

草煙卷
入帶見生衛
木磐常
城
會商五廣
京

A black and white illustration of two people in traditional Chinese clothing. The person on the left is a woman with her hair in a bun, looking towards the right. The person on the right is a man with a mustache, also looking towards the left. They appear to be in conversation. The man is holding a cigarette in his right hand. The background is dark and textured.

改修落成と電話開通
久しく改修中の處彌々落成仕候間不相變
御最負の程願ます
京城旭町二丁目（名古屋城横へ入る）
待合 醉 月
電話二六五番

電話
開通

千參百八拾貳番

南大門通光宣門側

待合

紅

葉

十二月二十日開業
本月中以三割引

京城支店
京橋本町四丁目(電話二二六九)
仁川仲町二丁目(電話二〇〇)

川仁河合寫眞館

電話開通千四百九番
明治町一丁目
為里徳

文
夏
り
徳
商
店

本院は左記の時間割を以て左の
 従事す入院の需めに應ず
外科花柳病科
 前漢城
 ドクタ王
 多摩市電王間九時より五時ト至

內科小兒科

龍山榮町
建具指物
硝子板
渡邊商店

同
自午後一時至四時
龍山榮

龍山居留民團囑托

龍



京華光
店 淺

胃腸消化

右は最近内地に於て急激の需用を來す
理想的絶品にして所謂實業には無
各地有名な藥店に於て販賣す

●大韓醫院御用藥

韓國一手賣捌元 京城光化門

特約版

漬味醬

油噌物

京城

自賣

東京

平

品名 一牧三場

酒田丸 元山・清津浦航行
立神丸 十二月廿九日午後時出

御乗船ノ際ハ税關波止場ヨリ本船
迄送迎船外ニ係々賃入ニ限ラセテ

1